

## 審査の結果の要旨

氏名 <sup>いたさか</sup>板坂 <sup>のりこ</sup>則子

本論文は、曲亭馬琴（1767～1848）の読本や合巻を中心とした小説作品の構想の詳細な分析を通じて、馬琴小説の発想・技法や、構想の生成・変容の具体相とその要因を明らかにし、あわせて当時の読書界における馬琴作品の受容様相と、戯作の社会的な位置について、多方面から考察したものである。本書の構成は、第一章「馬琴合巻—化政期合巻と役者似顔絵」が「化政期合巻の世界—馬琴合巻と役者似顔絵」等の三節、第二章「馬琴読本—版本と稿本から見た物語の創造」が『占夢南柯後記』に関する二節および『南総里見八犬伝』に関する四節、第三章「馬琴戯作の原型—想像力の基底と瀧澤家」が「馬琴戯作における想像力の原型—馬琴と「小夜の中山」伝説」等二節、第四章「戯作の読者と読書—草双紙と浮世絵」が「草双紙の読者—婦幼の表すもの」等三節からそれぞれ成る。

第一章は、化政期の馬琴の短編合巻で多用される、挿絵中の登場人物に歌舞伎役者の似顔絵を用いる手法について、稿本を含めて網羅的検討を加え、馬琴がこの手法を積極的に推進した作家であったこと、しかし実在の役者の似顔を取り込むことが、徐々に筋立ての自由を拘束するようになったため、後にこれを放棄するに至ることを明らかにする。

第二章は、『占夢南柯後記』の稿本と版本を比較し、巻数を増やすため施された切り継ぎや加筆の箇所を逐一明らかにした上で、新たに挿入された部分は主筋に関わるものではなく、脇筋に属する世話物的な人情描写の場面であることを指摘し、この人情中心の長い場面の挿入が、他の馬琴読本にも共通する特徴であることを明らかにする。また『南総里見八犬伝』については、日記や書簡等を博搜して執筆過程を復元し、膨大な諸本調査の上に初版の書誌的特徴を把握し、稿本の精査から挿絵作成の事情を考察するという基礎的研究とともに、『八犬伝』の構成に深く踏み込み、前半部が馬琴の意図を越えて登場人物が動かしてゆく世界であるのに対して、後半部が馬琴の意図によって統御された世界であることを明らかにする。

第三章は、小夜の中山伝説に依拠した『小夜中山宵啼碑』に見える「妊娠中の女性が殺される」「兄は妹を殺す、または害を与える」等の五つの話型が、以後の小説にも頻出することを指摘し、表面的には儒教的規範にそった形で描かれている小説内の家族的人間関係の裏に、馬琴の無意識下に存在する、暗部として人間関係への傾斜があることを指摘し、これに実際の瀧澤家の女性をめぐる人間関係の投影があることを明らかにする。

第四章は、草双紙の主たる読者とされる子供と女性につき、実際の作品中における読者の描かれ方を丹念に追い、また草双紙の女性読者への対応の工夫を、馬琴と南仙笑楚満人を例に挙げて丁寧に論じる。

本論文は、読本のみならず、読本とジャンルの密接な関係がある合巻を取り上げ、ジャンル横断的な視点から、馬琴小説全体に共通する構想や技法を考察した所に重要な意義がある。かつその考察が、稿本にまで詳細な検討を加え、一作品における構想の変化を十分に踏まえたものであることが評価できる。その結果、馬琴小説における人情描写の意味や、小説内人物の原型的な人間関係の基盤にあるものが、初めて明らかにされた。また、馬琴合巻における役者似顔絵の網羅的な調査、『八犬伝』の初版本の書誌学的考察等も今後の馬琴研究に大いに裨益するものである。膨大な作品を残す馬琴ゆえ、今後もここで直接扱われた作品以外にも考察を広げ、また別の観点からの考察も必要となるだろうが、馬琴小説にジャンルを越えて共通する重要な構想や技法のいくつかを明らかにしたことは、馬琴研究史上高く評価できる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断した。